アイルランド問題に関する J・F・ブレイの見解

上野　格

一

初期英国社会主義者の中には、アイルランド問題を社会主義運動の視角からとらえた者はいなかったと従来は思われていた。オウエンはたしかにアイルランドへの講演旅行を行なって、協同組合社会主義の共同体を作ることを宣伝したが、それは、W・トムスンに、オウエンを貧民救済の方法を宣伝しているにすぎぬと「誤解」させ、また、その上流階級への援助要請にうんざりして顔をそむけさせる程のものでしかなかった。[1] そういうトムスン自身も、コークの大地主でアイルランド貧農の救済に日夜心をくだき、また、コーク市の学校教育改善についての提案を小冊子[2]で出版したりもしているが、それもいわば善意で進歩的な知識人の社会活動の域を出るものではなかった。

(1) One of The Idle Classes (Thompson, W.), Labour rewarded, London, 1827. p. 98. これは一八二〇年頃のことらしい。トムスンは、このあと半年にわたってオウエンの説を検討し、それを全面的に受入れるにいたる。

(2) Thompson, W., Practical education for the south of Ireland, in letters addressed to the proprietors of the Cork Institution, on the propriety and necessity of directing its funds to their proper object, the diffusion of knowledge, by a useful and practical system of education, applying science to the common purposes of life, Cork, 1818.

彼らに続く時期には、オコンナー、オブライエンらのアイルランド出身の指導者が、チャーティズムを盛上げ、四十年代後半からは、E・ジョーンズが、オコンナー、マルクス及びエンゲルスの影響の下に、チャーティズムに社会主義的色彩を加えてゆく。R・フォックスによれば、このE・ジョーンズが、イギリスとアイルランドの労働者を団結させようと努力した最初のイギリス人であるとされる。(3) だが、初期英国社会主義者たちの中にも、アイルランド問題を社会主義的に、即ち、階級の問題、植民地の問題として、又、国際主義の観点から取上げた者がいるのではないか、というのが以前からの筆者の半ば希望的な推測であった。本稿ではその一人としてブレイを取上げ、二十年代に活躍した初期英国社会主義者には見られぬブレイのかかる特徴が、その労働運動家及びチャーティストとしての実践活動と、特に、オブライエンの影響によるものではないか、と筆者が推測する理由を提示したい。

(3) Ralph Fox, Marx, Engels and Lenin on IRELAND, N. Y., 1940. p. 40. 著者はこれにすぐ続けて、「だが、この二つの労働者階級の共同の敵（their common enemy）、即ち、イギリスの地主及び資本家達、を打破るためにはさきの両者の団結が必要であることを明確に見通したのはマルクスとエンゲルスが最初であった」と述べている。

二

ブレイのアイルランド論は、遺稿「ユートピアからの航海」[4]にある。そこでは、アイルランドは Erino（＝Erin or Eire）という名で登場する。これは、Brydone（＝Britain）の近くにある大きな島で、数百万にのぼるその国民はイギリスの貴族政府に征服されている。

(4) Bray, J. F., A voyage from utopia (1842), London, 1957. この書物の大体の内容については拙稿「ブレイ『ユートピアからの航海』」成城大学経済研究第十八号（昭和三十八年十一月）を参照されたい。

ブレイはこの国の説明を、まず、その宗教的支配からはじめる。この島に広くゆきわたっている迷信（superstition, 宗教を指す）の形態は、旧式で既にほとんど論破されてしまっているカソリックという形態である。この派の僧侶たちは、彼らがブリテンでまだ勢力を持っていた間は、その教義や権威にさからう者たちを残酷に弾圧してきた。この、ブリテンのカソリックは既に二世紀も前に抑圧され、その財産や寺院はブリテンの貴族政府に没収され新しい僧侶の集団に移譲された。この新僧侶集団は迷信（宗教）を純化し、原初の姿にもどしたと称している。実はカソリックの祭式にほんの僅か無意味な修正を加えただけなのであるが。

アイルランドの民衆はカソリック僧侶の支配下にあり、そして又、イギリス貴族の監視の下にある。この後者はいつもの強欲さでカソリック信者の財産を強奪し、それをイギリス人資本家（Anglo-squeezos）に与えてしまう。従ってこの敵対的な二集団の間にはすさまじい敵意が渦まいている。アイルランド人達は、彼ら自身の僧侶達を養うのに加えて、嫌いなイギリス人資本家達をも同様に養わさせられる。この資本家達はどの産業部門か

らも無差別に酷税を取立て、しかも、この強盗行為をイギリス人貴族達に保護され援助されている。アイルランドの民衆は、敵の搾取に対してたびたび勇敢な抵抗を行なうが、軍隊に蹴散らされ、殺されて、イギリス人資本家や僧侶から財産を守ることが出来ない。(5)

(5) Bray, J. F., op. cit., p. 104.

ブレイのこうした叙述は、一六九一年のリメリック条約に続く種々の刑罰法規による旧教徒弾圧の歴史を振返るとき、核心を非常に鋭くつくものになっていることに気付く。例えば旧教徒のアイルランド人は、一切の公職はもとより、教師になることも禁じられ、二倍の国防税を徴集され、旧教僧侶を宿泊させること三度で全財産を没収された。他方、新教徒は、立法行政司法及び軍事を独占し、教育をにぎり、更に、種々の財産上の特権を得ていた。例えば彼らは五ポンド五シリングで、旧教徒のもつどんな馬でも買取ることが出来た。旧教徒には、新教徒から土地を買収、相続し、又は贈与をうけることが禁じられており、新教徒は旧教徒のひそかな土地買収を告発すればその土地の所有権を得た。旧教徒地主は土地を全部の子供に分割相続させねばならぬが、もし長男が改宗すれば長子のみの相続が許された。小作農は、土地改良の結果収益を増加させても、その⅔を借地料として支払わねばならず、借地料が⅔を割っている場合は、それを最初に発見、告発した新教徒がその土地の権利を得た。こうして、旧教徒地主は零細化し、小作権は不安定になり、土地改良の意欲も失われていったのである。(6)

(6) 矢内原忠雄「アイルランド問題の沿革」、『帝国主義下の印度』昭和十二年、大同書院、所収、二五七―九頁。ブレイは一八二九年の旧教徒解放法について何ら触れていない。これは、アイルランド問題の本質が宗教問題ではないことを彼が知っているからである。事実、ダニエル・オコンネルも二九年には、旧教徒の権利ではなく、アイルランド

人の権利を主張するようになる。

アイルランドの労働貧民の状態と階級支配についても、ブレイは、宗教的支配の場合と同様、その二重支配を指摘する。ブリテンの貴族達はアイルランドの貴族達と協同してアイルランド民衆の搾取を行なう。ために彼らはブリテンの労働貧民より一層悲惨であり、生存に必要なだけも手許に残せぬほどである。飢饉がこうした不幸な民衆の常態になり、彼らは食物の屑をあさり、病に犯される。こうして、年々、無数の人々が飢えと病で倒れてゆくが、貴族たちは、こうした悲惨を何一つ知らず、また、気にもとめず、ブリテンに渡って、相棒のイギリス貴族達と共にあらゆる種類のぜいたくと肉欲にふけっている。後に残した飢えた民衆の犠牲の上で。

労働貧民が常に飢えていると言っても、それは、アイルランドが不毛の地であることを意味するのではない。逆にそこは非常に肥沃な土地であり、現在よりはるかに多くの人口を豊かに支えることの出来る土地なのである。だが、不正で欠陥だらけな制度のために、その民衆は地上最低に卑しめられた悲惨な存在になっている。そのため、アイルランドという言葉は、近隣諸国では、政治上の不正と僧侶達の偽瞞の結合を意味する通り言葉になっている。それは、他のどのような言葉を用いても表現できぬ程のものである。ましてユートピアの言語には、連合した貴族と僧侶が不幸な民衆に加える苦しみを表現できるような用語が全然存在しない。

(7) Bray, J.F., op. cit., p.104~5.

こうしたブレイの筆が、アイルランドの悲劇を如実に浮彫りするものであることは、多くを言うまでもないことであろう。

「アイルランドは飢えになれていた」[8]。

(8) James Hawthorne (ed.), Two centuries of Irish history, London, 1966. p. 46.

「ウェリントン公がこう書いたのは何も不思議ではない。

『アイルランドに毎年おこる飢餓は、連合王国の他のどのような災害よりも強く私を悩ませる』」Ibid., p. 46.

ブレイの描いたアイルランド農民の飢餓の有様は、実は、執筆されてから五年後の一八四六〜七年に、再び、アイルランド全土に、地獄絵さながらの姿で見られた。

十九世紀はじめには、アイルランド農民は馬鈴薯を主食とするようになり、地主には、労働地代、オート麦などの穀類の現物地代又はその代価による貨幣地代を納めていた。農民の日常生活にはまだ貨幣は殆んど入ってきていなかった。従って、馬鈴薯が不作になっても、他の食物を入手する方法はなく、不作はそのまま飢えを意味した。翌年の種薯にも手をつけねばならぬ程の凶作は、連年の凶作即ち餓死を意味する。四四年にアメリカに発生した馬鈴薯の伝染病は四五年秋にはアイルランドに不作をもたらし、種薯をへらし、四六年の凶作を招いた。既に四五年には、馬鈴薯の伝染病のおそるべき蔓延が伝えられ、未曾有の飢饉が迫っていることを地主は首相に警告し、救貧院 workhouse は、飢饉に加えてチフスの流行も目に見えていると警告していた。しかし、ピール内閣のとった対策は、三名の教授に、腐った馬鈴薯をたべられるように調理する方法の研究を委嘱することだった。三教授は、長く手間のかかる方法で腐った馬鈴薯を調理した後、それをオートミールか小麦粉にまぜて食べる方法を案出し、その方法を七万枚も印刷してアイルランドに普及させようとした。教授達は、飢えた農民達が生れてこのかた、オートミールだの小麦粉だのを食べたこともないことや、字を読める者はほとんどいないことを、何ら御存知なかったのである。(9) 農民たちは、「がちようになりたい、そうなれば、神様に召されるその時

まで、穀物をたべておだやかに、平和に暮してゆけるもの」[10]、と歌いながら、自分達の作ったオート麦や小麦を、小作料としてイングランドに送り続け、自分達は飢えに苦しみ、餓死していった。ピール内閣はとうもろこしを緊急輸入した、しかし、倉庫を満たしたこの食料は、飢えた民衆の口には入らなかった、何故なら、「業者が利潤をあげられぬ程の価格で安売りしてはならぬ」という方針から、市価の倍額で売られたからである。ウエストミンスターでは、ピールが、ダニエル・オコンネルの批判にこう答えていた、「議会が開催されている間に、あるいは必要かもしれぬ一層の手段を講ずることは何ら困難ではない。しかし、私の見るところでは、名誉あり学識ある紳士諸君は、あまり寛大になりすぎるのは賢明ではないという私の見解に賛成のようである」[11]と。ブレイの指摘する、アイルランドの土地の豊かさと制度のもたらした人為的な飢餓、支配階級の無智、無反省と独善、が、こうしたいくつかのエピソードからも伺われる。

(9)、(10) James Hawthorne, op. cit., p. 47.

(11) Sir Robert Peel in a reply to Daniel O'Connell in the House of Commons. Quoted in *Two centuries of Irish history*. p. 49.

小作料滞納で農民は追い立てをくい、病人も叩き出されて小屋は取こわされた。村に残って寒さと飢えに苦しむよりはと、人々は町の救貧院 Workhouse に救いを求めた。そこは熱かった、但し、チフスの熱で。汚れきって骨と皮ばかりの農民でぎっしりつまった救貧院は、そのまま、チフス菌の培養場であった。結局、死からのがれるためには、彼らはアイルランドを棄てねばならなかった。だが、移民船もまた海に浮ぶ培養場でしかない。太西洋の移民船航路は、ヨーロッパからアメリカまで、もしたてられるものなら全部が十字架で埋ってしまうほ

どの墓場と化してしまった。アメリカに上陸した人々も幸せとは言えなかった。四七年に上陸出来た「幸運」な人々のうち五千人以上が、そのまま永眠した。働きはじめた人々には、低賃金も貧民街も、アイルランドとは比較にならぬ幸福であった、だがそれは同時に、新世界の仲間達の賃金を引下げ、条件を悪くする効果をもつものであった。新世界でもアイルランドの労働貧民は歓迎されなかったのである。[12] ブレイはまだこの悲惨を見ぬうちに書き、そこで既に、その惨状をあらわす言葉がないと言った。この悲劇については何と言うだろうか。

(12) James Hawthorne, op. cit., p. 51～2.

ブレイは更に論旨をすすめて、アイルランド人労働者がイギリス人労働者と敵対的な関係に立たされ、共同の敵を認識出来ずにいる状況を描きだす。

アイルランドの民衆は親切であり寛容で、多くの良い性質をそなえているのだが、イギリス人には好かれない。彼らは大挙してブリテンに渡り定住する、何故なら、故郷にいるよりはこちらの方がはるかに良い生活が出来るからである。これが労働者どうしの深刻な対立を生む。

「ある特定の生産部門に職を得ようとする人の数が多ければ多いほど、貴族や金持の支払う価格は少なくなる、何故なら、彼らは、貧困で飢えた人々の中には、どんな仕事でも、その価格がたとえいくらでも、やりたがる人がいることを知っており、従って、誰かが低い価格に甘んじれば、他の人々は同じにすることを余儀なくされるからである。と言うのも、少い報酬で働こうという人がいる時に、多くを要求する人を雇おうとする人はいないからだ」。[13] いくら安くても働きたい、というアイルランド人は絶えずブリテンに流れこみ、ブリテンの労働貧民の条件を引下げる。両国民衆の間には警戒心や争いがおこり、屢々衝突をひきおこす。こうした事情を、政府

を構成する貴族たちは良く知っており、彼らは、この国民的敵対感情をあまさず利用する。彼らはイギリス人兵士たちをアイルランドに送りこんで、飢えた貧民たちを弾圧し不正と抑圧に従わせ、アイルランド人兵士を同じ目的でイギリスにつれてくる。両方の島の民衆は、こうして、同国人にやられるよりは一層効果的に服従させられる。

「両国民は、共同戦線を張って（making common cause）、これまで長いこと両者を苦しめてきたこれらの邪魔物を取除く代りに、お互いを掠奪し抑圧するために、その共同の敵（common enemy）に、愚かしくも自分たちの力を譲り渡してしまう。だが、これからの経験で、彼らは、必らず、英智を身につける[14]」。

これが、ブレイのアイルランドについての結論であり期待である。

(13)、(14) Bray, J. F., op. cit., p. 105, 106.

同国人による場合よりも一層効果的に弾圧出来るというのは、弾圧に手心の加えられることが少ないからである。一七九八年の反乱前後の「ユナイテッド・アイリッシュメン」に対する弾圧のすさまじさは、「二十世紀のナチズムを先取り」（James Hawthorne, op. cit., p. 7.）する程のものであったし、一九一九年からの独立戦争の際、イギリスから特に送り込まれたブラック・アンド・タンと呼ばれる兵士たちは、今でもアイルランド人の憎悪の的である。

なお「イギリス系のプロテスタント地主階級(は)…農民を「共同の敵(コモン・エネミー)」と呼び、これを獣のように遇した」と別枝達夫氏は書いている。（大野真弓編『イギリス史』山川出版社、昭和二十九年、三一一頁）

三

ブレイの論述のうちには、マルクスについて後述するような、アイルランドの解放が欧米の革命運動にもつ役

割の検討はない、つまり、世界史的な革命の展望が示されているわけではない。その意味で、イギリスとアイルランドの労働者の団結と共同戦線の呼びかけも、国際主義（Internationalism）と呼ぶにはあまりにも簡単で感覚的であり、規模の小さいもののように見える。

だが、彼はアメリカに関する考察の部分で、黒人奴隷と白人労働者が同じ利害に立つことを明確に示して彼らの階級的連帯の必要を説いており[15]、また、「ブリテンか他の近隣諸国で貴族と労働貧民の関係に大きな変化がおこれば、アメリカにも同様の変化がすぐおこる[16]」とのべて、社会変革の国際的影響と、イギリスの占める役割の大きさに彼が注目していることを示している。フランスについては、しかし、アイルランドやアメリカの場合に示されているような拡がりのある考察を示していない。これは、ブレイがまだフランスを訪れておらず、フランス語の勉強を始めてはいたがまだ十分ではなかったことと無縁ではあるまい。「ユートピアからの航海」の中でフランスについて記されている部分のうち、ブレイのフランスについての具体的な知識を示すものは、その革命の経緯についての部分のみである。

(15)、(16) Bray, J. F., op. cit., p. 149, 148.

ブレイには、たしかに、全欧米の労働者階級に正面から団結を呼びかけるような性質の国際主義はない。だが、既にイギリス、アメリカ、アイルランドの三国については、共同の敵との闘争における労働者階級の団結の必要を見ていた。それに加えて、彼には、国際主義への逆の接近、即ち、国際的な交流を妨げているものの認識がある。彼によれば、それは、無数のセクトに分れた宗教、国により異なる言語及び交通手段の未発達である。宗教を彼は階級支配の有力な一制度と見、「ユートピアからの航海」全巻にわたって、僧侶の言動を批判するの

であるが、国際的交流（international communication）の欠除を指摘する時には、狂信者達が他国の狂信者達に加える残酷、大多数の民衆の、他国の事情には全く無智なままに、他国民に対して抱く怖れ、ねたみ、嫌悪、がまずあげられ、それを貴族達があおり、民衆をだまして、隣国の侵略に利用していると説明する。言語については、世界語の発明の必要がとかれる。

「諸国家間の調和が拡がるか持続するためには、その前に、迷信（宗教）と言語に関して意見の一致がなければならぬ。そのような事態に反対するものは、たかだか、時間が発見し取除いてしまえるような原因だけである。全世界的な交流の方法なしには人類の間に全世界的な友情は存在しえない。だが、現存する言語はどれもこの目的にかなわない。国民のねたみや反感はそのようなものの邪魔をする。こうした感情は望ましい国際交流によってのみ十分克服できるのだが、この国際交流のためには、その手段があらかじめ整えられていなければならない。このような状況の下では、一つの言語が発明されよう、それは現在使われているどんな言語よりすぐれており、どの国民にも等しく受入れられよう、何故なら、それは敵の言語ではなく、征服者の言葉でもないからである。世界のいわゆる文明化した部分が一層文明化され、進んだ社会制度が導入され戦争が二度となくなれば、人類には余裕が生じ国際交流の希望がはるかに多くなり、共通の言語が抵抗なく用いられはじめ、根をおろすようになろう。それは世界中にひろまり、遂には文明それ自身と同じく全人類を包みこまずにはおかない[17]」。

(17) Bray, J.F., op. cit., p.160.

ベーコン、デカルトの例をひくまでもなく、世界語の構想、工夫の歴史は古く、また、バベルの塔の故事に示されているように、共通の言語を欠くことが人類に不和やいさかいをもたらし、協力して文明を築きあげることを

不可能にしているという認識も古くからのものである。その意味では、ブレイに何も新たな貢献を見出すことは出来ない。ただ、後年、ザメンホフが抱いていた国際語への期待が、この引用と同じ性質のものであったことを、ブレイのために記しておくことは許されよう。第一インターは第二回大会（一八六七年）で労働者の国際的団結のための国際語の採用を決議している。ブレイにも、この必要を理解し主張するに十分な認識があることは既に見た通りであるが、しかし労働者の国際的団結という視点を明確に打出すにはいたっていないようである。

労働運動及び社会主義運動における国際主義の理念及び運動は既にフランス革命に発し、イギリスでは、トマス・ハーディが一七九二年に創設した最初の労働運動、ロンドン通信協会、フランスではフランソワ・N・バブーフが一七九五年に創設した最初の社会主義運動、〝平等の陰謀〟となってあらわれている。反動期をへて、二度目に国際主義の高まりが見られたのは一八三〇年、七月革命に続く時期であった。そして、イギリスにおけるこの時期の国際主義者は、ブオナロッチの「バブーフのいわゆる平等のための陰謀」の訳者ブロンテール・オブライエン及びジュリアン・ハーニイであった。[18] アイルランド人であり国際主義者でありそしてチャーティストのschoolmaster であったオブライエンの姿を最もよく示すものの一つに、「アイルランド人労働者へのイギリス人労働者の呼びかけ」がある。一八三八年十一月四日のOperative紙にのったこの論文[19]は、イギリス、スコットランド、ウェールズの急進的改革者達がアイルランド人民にあてた呼びかけ—一三六人のチャーティスト代表と全国の労働協会の代表が署名した—についてのものである。

オブライエンは、その中で、「両国の被抑圧者たちの神聖な同盟は、両者にとって共に何にもまして重要なものである」と説き、アイルランドはこれまで、こうした、自らを救う機会を得られずにいたこと、その政治史の

上ではじめて、アイルランドは長い間失われていた権利の回復のために、イギリス、スコットランド、ウェールズからの援助の申出をうけたこと、この申出は諸政治団体の代表によってなされたのであり、彼らはブリテンの人口の9/10を代表するものであること、を説明する。アイルランドが自らの解放に大ブリテンの民衆の援助を不可欠とするように、イングランド、スコットランドの貧しい民衆の解放にはアイルランドの援助が不可欠である。何故なら、アイルランドの莫大な農産物が年々イングランド及びスコットランドに輸入されて、不在地主、土地貴族、及びアイルランドに貸出している高利貸を富ませており、逆に、イングランド及びスコットランドの工業製品が、同様にして、年々アイルランドに流れ込み、地主、商人、弁護士、僧侶、政府役人、軍人、及び多数の仲介人を富ませているが、両国の労働者には一シリングの見返りもないからである。

「さて、この二つの島の生産的階級が同じ欲求と同一の敵を持っていることがわかったからには、同じ救済策を求め、共同の迫害者 common oppressor に対して共同の運動 common cause をおこそうではないか。どのようにしてか。……アイルランドの抑圧された、又は、代表をもたぬ階級と大ブリテンの抑圧された、又は、代表をもたぬ階級の大同盟によって。……何時か。国民請願へのアイルランドの百万の署名がなされて、アイルランドの協力が立証されたその時から……」。

(18) Cole, G. D. H., Socialist thought; the forerunners 1789～1850, London, 1953. p. 142.

(19) Max Morris (ed.), From Cobbett to the Chartists, London, 1951. p. 244～5.

先に見たブレイの結論とここでの common cause の呼びかけとは全く軌を一にしている（異なるのは、選挙権獲得の運動にかける期待である）。私は、このオブライエンの論文が一八三八年末であることに注意したい。

ブレイが「労働者階級のうけている不当な処遇とその救済策」[20]を週刊の分冊で出版したのがこの年の同じ頃であり、「ユートピアからの航海」は四〇年から四一年にかけて書かれている。そして、オブライエンの論文やそれの解説する呼びかけは丁度この両著作の間の時期に出されている。「不当な処遇」の中では、アイルランド問題についても、また国際主義的主張にしても全然姿を見せておらず、「ユートピアからの航海」にいたって、かなり鮮かにそれらが登場したことには、こうしたチャーティストらの活動、なかんずくオブライエンに影響された面がかなりあるのではないかと思われる。[21]

(20) Bray, J. F., Labour's wrongs and labour's remedy; or the age of might and the age of right, Leeds, 1839. これははじめ一八三七年十一月頃から、リーズ労働者協会での講演の形で発表され、それをもとに、三八年末に週刊の分冊で出版された。単行本で出されたのが三九年である。

(21) ブレイとオブライエンの思想的親近性を検討した論文を筆者は調査不十分で探せずにいるが、両者を並べて扱っている例はある。「別々の階級的行動（資本家と労働者の―筆者注―）の主張を支持するのに用いられた経済的命題は三個であった、それらは屢々明らかに全く別々に、国の各地で述べられた。その第一は、労働がすべての価値の源泉であり、その権利は労働者達自身によって守られるということ、第二は、製造業者達が労働に非常な長時間働くことを強要し、労働の正当な報酬をそれから奪っているということ、第三は、搾取が労働〝予備軍〟の存在によって手助けされており、それは賃金を強引に引下げ労働条件を劣悪にしているということである。これら三個の命題は多くの弁士や労働者階級のジャーナリスト達が演説に常用したものの一部であり、又、J・F・ブレイやブロンテール・オブライエンのような社会理論家のものでもあった。彼らはこれらの命題を分析的な形でのべている。Poor Man's Guardian 紙や Northern Star 紙は経済的搾取と政治権力を直接結びつけて理解するところまで進んだ。『中産階級は』

とガーディアン紙は言う『この国の真の専制君主である。どんなに偽装しても、彼らはわが奴隷制度の張本人である、というのは、彼らの黙許と秘かな支持なしにはどんな専制政治も存在しえぬのであるから。政府は彼らのよこしまな目的を遂行するために彼らが持っている道具にすぎない』(Poor Man's Guardian, 2 Nov. 1833)」(傍点筆者) Asa Briggs (ed.), Chartist studies, London, 1959, reprinted 1962. p. 296.

オブライエンは一八三一年から Poor Man's Guardian の編集者であり、一八三八～四〇年には Northern Star の編集にたずさわっていた。

Thompson, E. P., The making of the English working class, London, 1965. p. 767 には、種々雑多な〝社会主義者達〟があたかもバルトロメオ祭の市に立つ露店のように、やたらとあやしげな意見を並べたてていたとのべたあとで、「この同じ市に作品を提示したもっと不屈で熱心な人々ーホジスキン又はトムスン、オブライエン又はブレイはまわりでがなりたてる独善的ないんちき商人を何度となく呪ったにちがいない」(傍点筆者) とある。

ブレイとオブライエンの思想的な近さを示す例には、又、社会革命に関する議論がある。ブレイは「不当な処遇」の中で、社会の革新を政治的変革 governmental change と社会的変革 social change に分け、後者即ち社会体制(=資本主義的経済体制)の抜本的変革のみが変革を根付かせると説く。彼のオウエン主義的提案即ち労働者の共同出資による「株式会社」は理想社会を樹立するための手段であり、過渡的な形態である。この立場は「ユートピアからの航海」においても変っていないが、前著においては抽象的、一般的な形で述べられていたこの体制変革の問題、殊に、政治的変革の限界の問題が、後著では、フランス革命の示す歴史的教訓として詳しく述べられている。そこには、国王、貴族、僧侶の圧制に抗して立上った民衆と彼らによる大量殺人、国王の復権、そして三十年のシャルル十世の逃亡とルイ=フィリップの即位、こうした経過をたどって、結局、以前以上の

階級的抑圧に労働貧民はあえぎ、更に次の革命を考えているという、状況が、描きだされており[22]、そうした歴史的経過の示すものが次の如く総括されている。

「…現在の状況は大衆の心をかの決定的な努力、つまり世間では革命という名で知られているものにむけて仕立ててしまう。…その行動の結果はそれに与えられる方向によってきまる。かくして、もしそれが政治的変革のみを求めるなら、想像上の悪を改め緩和しながら血の海の中を何年も進み続け、遂にはその仕事に疲れはてて、出発当初に比べて何一つ改善されていない状態に放置されてしまう。これがフランス人の運命であった。だが、もし社会的変革が求められるなら—つまり、もし、人間を苦しめる害悪が、政府の形態よりも社会体制により多く起因するものであり、政府も諸制度もその社会体制から生れているものであり、生みの親の体制が変革されない限り、それらは効果的に修正も変革もされえないこと、が発見されれば、その時には、社会的変革が成しとげられる。というのも、政治的変革はこれまでそれに敵対する力を無視してきたからである[23]」。

(22) Bray, J. F., A voyage from utopia. p. 154～5.

(23) Ibid., p. 190～1.

オブライエンは、バブーフのイギリスへの紹介者であることからも明らかなように、フランス革命については多くの知識を持っていた。彼がピュリタン革命、名誉革命、アメリカ革命を比較して論じた「歴史的発展の考察」と題する論文[24]（London Mercury 紙、一八三七年五月七日）には、ブレイの社会革命論と同じ主張が明快に示されている。

(24) Bronterre O'Brien, A view of historical development, in *London Mercury*, May 7 th, 1837. Reprinted

in *From Cobbett to the Chartists. p. 161~2.*

彼によれば社会革命 social revolution とは社会の異なる諸階級の義務や地位の根本的な改革のことであり、政治革命 political revolution はこれに反して社会のごく表面に作用するにすぎない。チャールズ一世の死後の commonwealth の樹立は、単なる政治革命であったし、一六八八年の革命も大地主の半封建的な寡頭政治にかえて、大地主と金貸しの混血貴族にイギリス議会を支配させただけで、大衆には何も与えなかった。一七七五年のアメリカ革命、一七八九年のフランス革命は規模もその民主主義的な性格もそれ以前とは異なるが、「それでもやはり、単なる政治革命であった」。フランス革命は、はじめて、貴族の特権を廃したり国王の特権を制限しようとしたが、「次第にそのもとの性格が変質し、商業階級が参加するにつれて、イギリスの一六八八年のウイッグ革命の性格をもつようになった」。「ロベスピエールの死は共和国の死であった—彼とともに、社会革命の望みはすべてきえた」。一七七五年のアメリカ革命はそれまでのうち最も完全なものであるが、アメリカの民衆は貧困と奴隷状態に急速におちこんでいっている。「その真の原因は…悪い財産制度である…それは…財産を不正に獲得したり伝えたりすることを許している…一七七五年は財産獲得と伝承の制度を変革しなかった。それは…単なる政治革命であった。財産制度をそのままに放置することで、革命は社会的害悪の胚種をみな時間の胎内で成熟するにまかせてしまう。それらの胚種が残っていれば、政府の特定の形態がどうであろうと結果は同じことである…」。

アメリカについてのブレイの見解も、このオブライエンに非常に近い[29]（実はここでも、アイルランドへの呼びかけの場合と同様、選挙権については見解が異なる）。社会革命の内容とフランス革命の評価について、両者の

見解が一致していることは明らかであろう。このオブライエンの論文が、ブレイのリーズでの講演―「不当な処遇」の素描―の数カ月前に出されていること、及び同書の中にはこうした見解が何度となく出ていること、に筆者は興味をひかれる。

㉕ Bray, J. F., op. cit., chapter eight.

四

ブレイに見られたアイルランド問題の扱い方、国際主義及び社会革命のとらえ方は、二十年代に活躍した他の初期英国社会主義者達には見られぬものであり、従来、オウエン的乃至はトムスン的な社会主義思想とわれわれの考えていたものに比べて、いわば、はるかに〝労働者的〟な、たくましさを備えたもののように思われる。では、何がこのような前進をブレイにもたらしたのか。筆者には、それが、急進主義的新聞 Voice of the West Riding の編集者、リーズでの労働運動家、チャーティストといった彼の実践活動の経験であったように思われる。

彼は、チャーティズムの母体、ロンドン労働者協会からの代表を迎えて一八三七年九月に発足したリーズ労働者協会 Leeds Working Men's Association の設立委員の一人であり、その財政担当であった。同年十一月にはオコンナーが Northern Star 紙をリーズで発行するようになり、これは、リーズをはじめ北部に大きな影響を与えた。当時リーズのチャーティストには、熱狂的なオコンナー派の実力主義グループ physical force men, 中道のオウエン主義者グループ、初期の急進主義者グループの三者があり、ブレイはこのオウエン派に属していた。彼はチャーティズムに単なる政治綱領ではなく根本的な社会変革を求めていたが、翌三十八年には、オコン

ナー的実力派に押されて、運動の指導部からは脱落してしまう。リーズでの運動はその後一時的には更に急進的、実力主義的になるが、やがて、普通選挙権要求の運動に圧倒され、一八四〇年夏には、チャーティズムではなく、選挙権獲得運動にかわってしまう。[26] 筆者がオブライエンとブレイの類似に注目するのは、こうしたブレイの労働運動の中での経験には、まず、労働運動及び急進主義の新聞（無印紙）編集上の先輩及び、理論的指導者として、更にリーズでの直接の同志及び批判者として、オブライエンが常にいた筈だからである。

(26) Asa Briggs (ed.), op. cit., chapter three.

ブレイがリーズの労働運動の中で、いわば中道派の位置にあり、途中で運動から離れていったのは、実は、その理論的立場から見てもうなずけることなのである。第一に、彼は暴力による社会変革を否定し、暴力革命 physical revolution が社会諸制度に触れず単に政治的独裁制を転覆してもそれは単なる権力移動にすぎぬとし、[27] 又、「力は築きあげるかもしれないが、推持することが出来ない」[28] として、代りに、大衆の理解に基ずく変革の必要を説いている。これを、先に見た政治革命批判、フランス革命から引出してきた教訓、とあわせてみれば、オコンナー派に対するブレイの批判的立場が明らかとなろう。第二に、ブレイは、選挙権獲得が労働者にとっては、単なる偽瞞にすぎぬと再三警告する。

「ある人々は、平等な権利について語るとき、それを、単純に、普通選挙権や秘密投票や議員の財産資格の撤廃のことだという、他の人々は第一原理に一歩近ずいて、君主制の完全打倒と共和国の樹立を求める。これらの自称正義の擁護者によれば、アメリカ合衆国の政治諸制度は完璧な例である。そして、真の自由と権利の平等が楽しめるのはこうした統治形態の下でだけだとわれわれは聞かされる。だがこの問題を検討してみると、次のこと

が確信できる、つまり、もしも連合王国の労働者階級が右の政治的変革を手にすることが出来たとしても、彼らは現在とほとんど全く同じ貧困と無知と悲惨の中にいるであろうということが[29]」。これは、非常にはっきりとしたチャーティズム批判である。勿論、リーズの中では、この批判（特に前者）は、チャーティズム一般の批判というよりは、Leeds Times を中心とする右派の批判を第一に意識していたのかもしれないが。筆者は先にブレイとオブライエンの近さを見る際、選挙権については異なると付記した。それは、オブライエンの中には、普通選挙権乃至は選挙権のかなり広い範囲への拡大が、フランス、アメリカ両革命の検討で指摘され、それが民主共和国を作ると考えている節があるからである[30]。ブレイからの右の引用の中では第二のグループに属する考え方と言えよう。ブレイにもそうした面が、殊にアメリカについて記されている部分に見られはするが、それより大きく、アメリカを例にして、再三述べられているのは、支配階級の行なう部分的な譲歩が労働者階級に自己満足を与え、問題の本質を見失わせることの危険である。

「イギリスの労働貧民よりはアメリカの労働貧民の方が希望は少ない。何故なら、彼らは知事を選ぶ権利を少しは持っており、又、イギリスやアメリカの貴族達がそれを重視しているのを知っているので、害悪をすべて除去する力が自分たちにあると思い、この力が何の役にも立たないのはその用い方が悪いからだと思っているからである[31]」。ところがイギリスの貴族はそのような譲歩を何一つしていないから、彼らは丁度活火山の上に座っているようなものだ、というのである。

(27) Bray, J. F., Labour's wrongs and labour's remedy. p. 116.

(28) Ibid., p. 214.

(29) Ibid., p. 17～8.

(30) Bronterre O'Brien, A view of historical development, *From Cobbett to the Chartists. p. 162.*

(31) Bray, J. F., A voyage from utopia. p. 141.

こうして、リーズを中心に、労働理論家としてもかなり活躍した筈のブレイは、運動から離れ、「ユートピアからの航海」を書き、弟にアメリカでの生活について問合せ（四一年）、遂に、四二年にイギリスを去る。H・J・カーによれば、渡米の主な理由は病と失職と著書（「不当な処遇」）の失敗による金銭的負担であるとされる(32)が、筆者はそれに加えて、リーズでの右のような運動との関係が原因の一つをなしていたと考える。アイルランド問題に端的に示されたブレイの、他の初期英国社会主義者に比べての新しさが、渡米後にはどのようになったか。チャーティスト達との接触を失ってからの彼の思想が、どのような展開を見せたか。それは次の課題である。

(32) Carr, H. J., "John Francis Bray," *Economica*, November, 1940. p. 406～7.

——補論——マルクスのアイルランド論とブレイ。

一八六九年末に書かれた「総評議会からラテン系スイス連合評議会へ」(1)の回状の中で、マルクスは、「アイルランド人大赦問題にたいするイギリス政府の態度についての総評議会の決議案」(2)に関連して、アイルランド問題に対する第一インターの立場を明示している。そこでは、まず、イギリスがヨーロッパの地主制度と資本主義の保塁ととらえられ、アイルランドはイギリス地主制度の保塁ととらえられる。アイルランド地主制度はイギリス軍隊で維持され、イギリスのプロレタリアートはアイルランドのイギリス人地主を維持することでイギリスでの彼らの立場を強化している。イギリスのプロレタリアはアイルラン

ドのプロレタリアを、丁度北アメリカの貧乏白人が黒人奴隷を見ていたのと同じように、競争相手として憎み、又、民族的、宗教的反感を抱いている。ブルジョアジーはこの分裂を人為的に維持することで自らの権力を維持している。従って、イギリスで社会革命をおしすすめるためには、まずアイルランドを分離させ、それによってアイルランドの中に社会革命を爆発させ、又、イギリス地主制度を崩壊させねばならぬ。完全な分離がイギリス労働者階級の解放の前提条件なのである。

マルクスのこうした把握を、先に紹介したブレイのそれと比べるとき、両国労働者階級がおかれている敵対関係、それぞれ支配階級に力をかし、自らの首をしめている状況についての理解は、黒人問題も含めてブレイにも同様に鋭く見られるが、アイルランド革命の、イギリスに与える影響の考察、更にその世界（欧米世界ではあるが）革命への展望がないことも明確に読みとれる。ブレイにはまだ、運動を展開するための指針としてのアイルランド論がないと言うべきであろう。それは、オブライエンにも、従ってチャーティストの運動の中にもまだなかったらしい。国際主義が社会主義運動、解放運動の中にやっと息づきはじめた時点に、第一インターの影を求めることは性急にすぎるのであろうか。

(1) マルクス、エンゲルス全集、大月書店、第十六巻三八一～三頁。

(2) 同三七七頁。